

イタリアにおける ヴィラ・庭園・風景の統合

第3回

ヴィラ・メディチ・フィエゾレ ——邸宅部分の構成とシーケンス

野口昌夫 | 東京藝術大学美術学部建築科 教授

大島 碧 | 東京藝術大学美術学部建築科 教育研究助手



野口

大島

第2回では、ヴィラ・メディチ・フィエゾレにおける「風景の統合」の前編として、ヴィラの理想的な立地条件、パノラマの眺望がやがて支配領域を象徴する眺めになっていく過程、それらの眺望と直接的に結びついた軸線、3つのテラスの立体的な関係性について述べてきた。この第3回では、その後編として、邸宅部分の構成とシーケンスについて紹介する。

邸宅

ヴィラが形成される可能性がでてくるのは、都市が周辺部への支配力を増し、田園を防御する必要がなくなった時代である。古代とルネッサンスの間の中世の時代にヴィラはなく、カステッロ（城砦）とポデーレ（農場）しかない。この邸宅のファサードには、ロτζィアがつけられているが、それは、農業建築のポキャブラリーが建築の装飾モチーフとして使用された最初の例であった。このことは、クワトロチェント（1400年代）のヴィラにおいて初めて、田園生活の文化的理想（ヴィレツジャトゥーラ）が農場やカステッロといった中世的な文脈から切り離され、独立した建築形態として進化したことを象徴的に示している。このロτζィアというモチーフは、邸宅の東西で使用され、邸宅の半屋外部分をつくりながら、中段・上段テラスからの邸宅への眺めに連続性を持たせている【写真1】。

東側のファサードの4つのアーチのうち、一番南にあるものはレンガで埋められているが【写真20】、これは、邸宅の北側が増築された時にファサードのバランスを保つために行われたとバルグリーニらが指摘している。この埋められたアーチを貫く軸線の先には、ベルヴェデーレがあり、本来は邸宅入口アーチーニッチの軸線と対称形をなしていた。ロτζィアのアーチを貫く2本の軸線は、上段テラスを横断し、ニッチとベルヴェデーレによって終結する【写真17】。

一方、ファン・デル・レーらは実測により、邸宅の内外で同じ長さの単位をもとに寸法体系が決められていることを指摘した。この平面に適用された幾何学システムについて、「邸宅・庭園・ランドスケープの平面形を数学的に統御するための計画手法の一つ」であり、「3者の結びつきを合理化するための手段」であるとした。

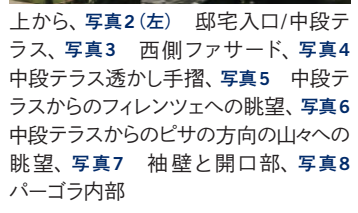
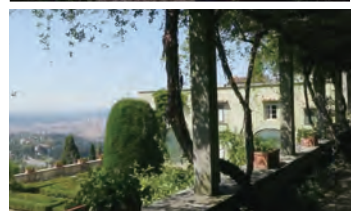
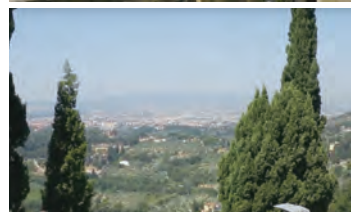
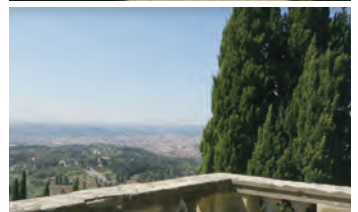
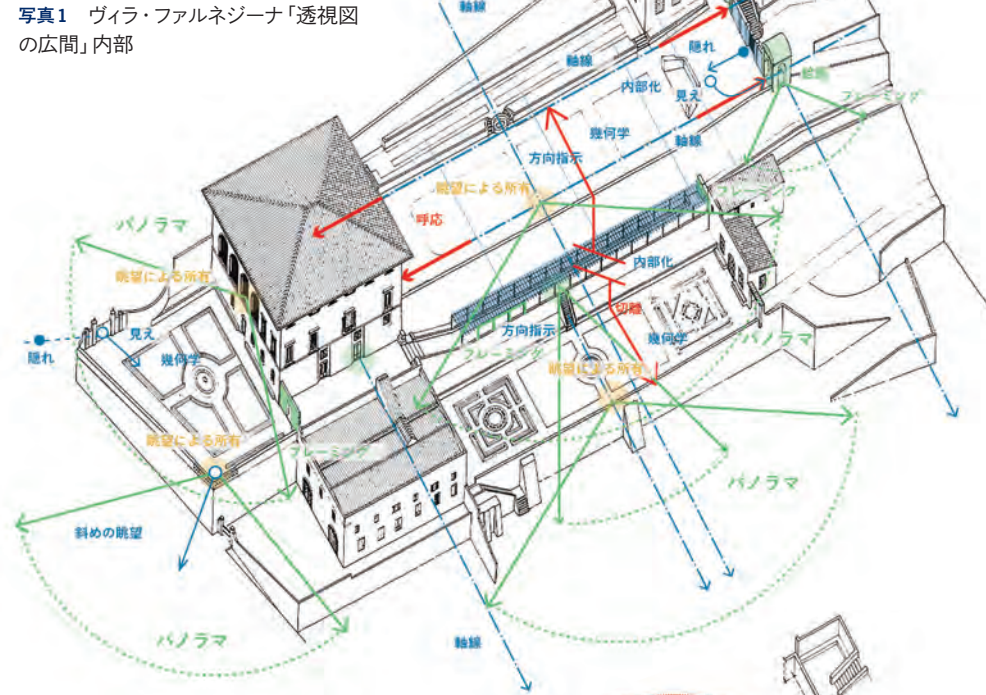
絵画

邸宅内部、ピアノ・ノビレの中央には長方形の広間がある。広間には外壁に窓がひとつもないが、ヴィレツジャトゥーラ（休暇を田園で過ごすこと）が絵画によって表現されている。壁に描かれたランドスケープの効果により、それほど閉塞感を感じさせない空間になっている。一方、ベルヴェデーレ（眺めの場）に描かれた絵画は、壁面の背後にある景色を描いている【写真19】。この仕掛けは、庭園からの眺望を示すと同時に、門扉の外からの視線を遮る役割を果たしていた【写真21】。この壁面の絵によって、ベルヴェデーレからの視線方向はフィレンツェの方向に誘導され、同時にジャルディーノ・セグレート（「秘密の庭園」の意。ヴィラの敷地の中でも特にプライバシーが高い空間として位置づけられた）の空間の秘匿性が維持されている。

このように、ルネッサンスのヴィラからの眺望や風景は、しばしば絵画によってさまざまな方法で演出され、補われる。コルティエーレ・デル・ベルヴェデーレでは、絵画はローマの全景への眺望を描いている。ヴィラ・ファルネジーナの「透視図の広間」では、ロτζィア越しに見える広大なローマへの眺望がトロンブ・ルイユ（だまし絵）によって完全に理想化された風景として描かれた【写真1】。ヴィラ・ジュリアでは、半地下のジャルディーノ・セグレートから見える空への眺望を壁面に描かれたランドスケープが繋いでいる。ヴィラ・キジでは、ファサード構成上の必要性によって円形アーチの入口が絵画で描かれた。

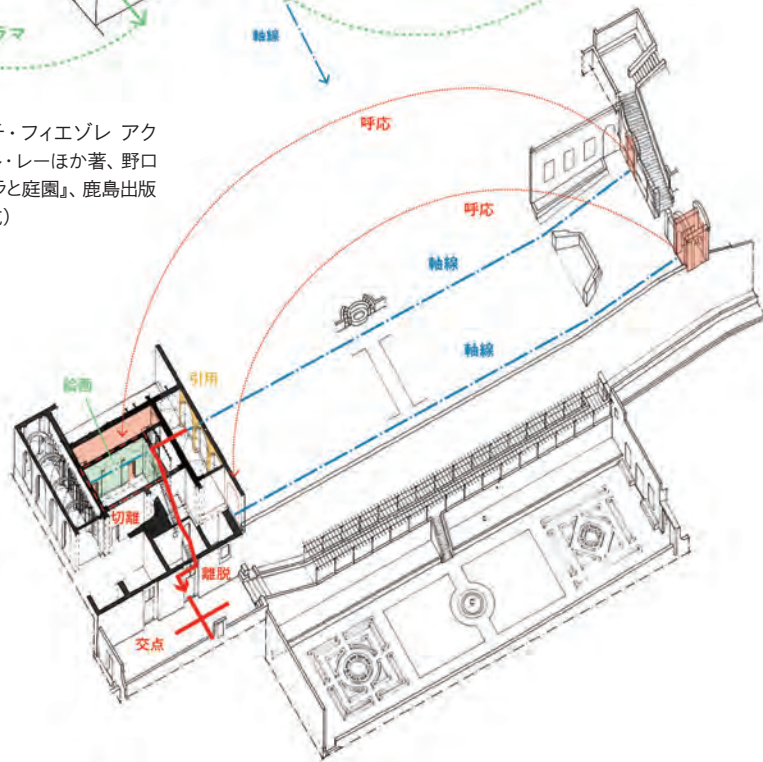


写真1 ヴィラ・ファルネジーナ「透視図の広間」内部



上から、写真2(左) 邸宅入口/中段テラス、写真3 西側ファサード、写真4 中段テラス透かし手摺、写真5 中段テラスからのフィレンツェへの眺望、写真6 中段テラスからのピサの方向の山々への眺望、写真7 袖壁と開口部、写真8 バーゴラ内部

図1 ヴィラ・メディチ・フィエゾレ アクソメ図(P.ファン・デル・レーほか著、野口昌夫訳『イタリアのヴィラと庭園』、鹿島出版会、1997より著作作成)



シークエンス

最後に、ヴィラ・メディチ・フィエゾレにおける「風景の統合」のありようを実際のシークエンスに沿って紹介したい。現在のアクセスは東側の上段テラスからのみ可能だが、この方法でアクセスすると、ジャルディーノ・セグレート秘匿性が失われてしまう。ここでは、外部空間のプライベート性の段階的変化をより設計意図に即して説明する

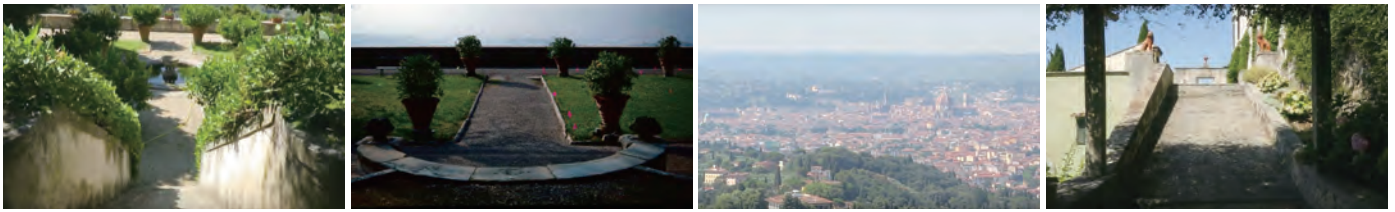
ために、本来の入口からのルートに基づき順を追って示す[図2]。

A…中段テラス

来訪者はまず、西の門から入る。中段テラスにアクセスする[写真2]。ここからは邸宅の西側ファサードが見え、2階部分にロτζシアが見えている[写真3]。

B…フィレンツェと谷への眺望

テラスからの眺望は、アルノの谷が広がっているところに向いているため、トスカーナの山並みは遠くに見える。中段テラスの南西の角は、



左から、写真9 パーゴラからの階段、写真10 下段テラス、写真11 下段テラスからのフィレンツェへの眺望、写真12 フレーミンクの演出①

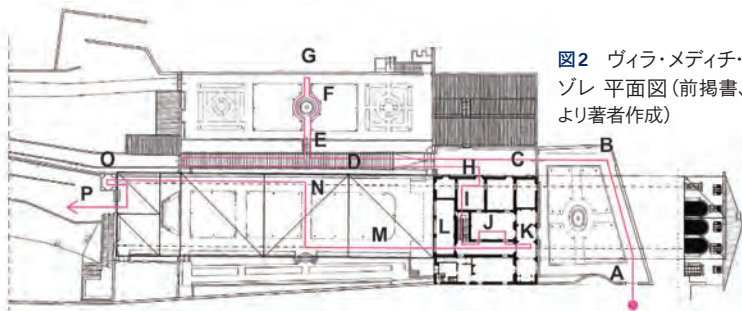


図2 ヴィラ・メディチ・フィエゾレ 平面図(前掲書、1997より著者作成)



写真17 2本の主軸線を受けるニッチとベルヴェデーレ

手摺が透過性のある意匠となっており、そこからまちを見下ろすと、ブルネレスキのクーポラが見える。クーポラ越しに、ヴィラ・マリニョッレが見える [写真4~6]。

C…壁に囲まれた建物南側スペース

邸宅部分から延びた袖壁に開口が穿たれている [写真7]。そのフレームをくぐって進むと、斜路の向こうに植栽で覆われたパーゴラが見える。

D…パーゴラ

パーゴラは日陰のスペースをつくり、北側は擁壁になっている。フィレンツェへの方向への眺望がパーゴラのフレーム越しに見えている [写真8]。パーゴラの反対側の端部は先ほどと同様、付属建物の袖壁に一人一人分の大きさの開口が設けられている。

E…パーゴラの間地点の急な階段

パーゴラの中ほどに下段テラスに下りるための急な階段が設けられている [写真9]。パーゴラからの眺めは、「カーペットのような南側テラス」が前景となることによって強調されている [写真10]。

F…下段テラス

下段テラスに降り、軸線上の噴水とテラコッタの瓶に誘導されるようにして、テラスの端へ進む。

G…下段テラスからの眺め

階段の軸線上に噴水があり、下段テラスの端部まで行くと、フィレンツェの眺めがパノラマに広がっている。ここからは、ブルネレスキのクーポラと、ヴィラ・ポッジョ・インベリアーレをはじめとした谷の向かいのヴィラが見えている [写真11]。

パーゴラに戻って、来た道を少し戻る。斜路の低い方から戻っているため、先ほどくぐってきた袖壁への視線の変化が演出されている [写真12~15]。開口部が、テラスの透かし手摺とその向こうの空を絵のように切り取っている。袖壁にはメディチ家の紋章が付けられている [写真16]。

袖壁とパーゴラ間の邸宅南側のスペースは、目の高さの壁で囲まれて、ここからは都市への眺望がみられない。

H…上段テラスと中下段テラスを分断するように建つ邸宅

邸宅は最上段のテラスと中下段のテラスを完全に分断している。パーゴラや邸宅南側のスペースから、上のテラスの様子を見ることはできない。

I…一直線の階段

邸宅の中に入る。階段を一直線に上がると、上階の廊下に到達する。

J…窓のない広間

階段を上がると広間のある階に出る。広間には窓がひとつもないかわりに、壁画にランドスケープが描かれ「理想化された田園生活」が表現されている。

K…西側ロジgiaからの眺め

西側ロジgiaからは、中段のテラスとアルノの谷が見える。

L…東側ロジgia

建物の東面から最上段のテラスにアクセスする。邸宅がテラスに接続している部分には、ロジgiaが設けられている。邸宅の出入り口と廊下は軸線を形成し、テラスの端部のニッチで終結する [写真17]。

M…最上段テラス(ジャルディーノ・セグレート)

ロジgiaから出た体験者が軸線に沿って歩くと、「自然の泉」から出る副軸線と出会う。90度方向転換をし、幾何学庭園を進む。

N…フィレンツェへの眺め

テラス越しにフィレンツェを一望する。最下段のテラスからの眺めと同じ軸線上にいたことがわかる [写真18]。

O…ベルヴェデーレ

ベルヴェデーレもまた邸宅のロジgiaのアーチと軸線で結ばれていた(現在はアーチが埋められて壁になっている) [写真19、20]。その軸に沿って、ベルヴェデーレに向かう。庭園の外側に面する背面は壁になっていて、壁にはその前に見える本物の景色を示す絵画が描かれている。中にはベンチが設えられている。

P…自然の斜面の森

最上段のテラスはジャルディーノ・セグレートになっている。最上段のテラスと門扉の間は斜路になっており、さらに、ベルヴェデーレの



左から、写真13 フレーミングの演出②、写真14 フレーミングの演出③、写真15 フレーミングの演出④、写真16 邸宅南側から見た袖壁



左から、写真18 上段テラスからのフィレンツェへの眺望、写真19 ベルヴェデーレ、写真20 埋められたファサードの円形アーチ、写真21 外側から見たベルヴェデーレ

背面も閉じ、斜路の一部に腰壁が設けられ、これらの要素が外の「自然の斜面の森」からの目隠しになっている [写真21]。

写真2・4～6・8・9・11～18……大島碧撮影
写真3・7・10・19・21……野口昌夫撮影

参考文献

P. ファン・デル・レー、G. スミンク、C. ステンベルヘン共著、野口昌夫訳『イタリアのヴィラと庭園』（鹿島出版会、1997年）

まとめ

全2回に分けてヴィラ・メディチ・フィエゾレにおける「風景の統合」について紹介してきた。ルネサンス期ヴィラのプロトタイプとなるテラス型の庭園、空間構成の中に織り込まれた都市への眺望、他のヴィラへの相互視認の要素などを概観してきた。ここでは、谷をはさんで互いが見合い、クーポラを中心にしたランドスケープが呼应しあうトスカナの典型的な「風景の統合」の形式をみることができる。

今回は、ローマ郊外の小都市カブラローラのヴィラ・ファルネーゼおよびカジノ・ファルネーゼについて取り上げる。都市全体を舞台装置のように用いたダイナミックな構成と、庭園に散りばめられた高度な引用・暗喩の手法を紹介する。

のぐち・まさお

1954年東京生まれ。東工大建築学科卒業。AAスクール大学院留学後、東工大大学院修士課程修了。1981年からフィレンツェの設計事務所勤務、1983年からフィレンツェ大学都市・地域研究科留学。1995年博士(工学)。2008年から現職。専門はイタリア都市・建築史

おおしま・みどり

1987年東京生まれ。東京藝術大学建築科卒業。同大学院在学中にミラノ工科大学建築社会学部に留学、2014年修了。隈研吾建築都市設計事務所を経て、2020年東京大学工学系研究科建築学専攻博士後期課程修了、博士(工学)。2018年から現職。風景研究所共同主宰

自習型認定研修の設問

設問1

ヴィラ・メディチ・フィエゾレに描かれた絵画の役割として正しくないものは次のどれか。

- 壁面の向こうの景色を示す。
- 都市の全景を描く。
- ヴィレツジャトゥーラ（休暇を田園で過ごすこと）が表現される。

設問2

ヴィラ・メディチ・フィエゾレにおける邸宅の特徴として正しくないものは次のどれか。

- 農業建築のボキャブラリーであるロジヤが初めてヴィラに採用された。
- テラス同士の往来を分断する構成になっている。
- すべての主要な室から都市への眺望がのぞめる。



認定教材の設問への回答は、CPD情報システムのページ <https://jaeic-cpd.jp/> にアクセスのうえ、お願い致します。

※不正解の場合は、単位に登録できない場合があります。

※自習型教材の選択欄における会誌『建築士』選択項目は、平成28年1月より建築士会員のみの表示項目になります。